

書評

スター生物学 (第6版)

▶ C. Starr, C. A. Evers, L. Starr 著, 八杉貞雄 監訳

スター生物学 (第6版) / C. Starr, C. A. Evers, L. Starr 著, 八杉貞雄 監訳 / 東京化学同人 2023 / B5判変型 368ページ 3,100円+税

10年ぶりに新たな翻訳版として本書、『スター生物学』が出版された。書店の生命科学の棚を見ると、実に多くの種類の教科書、参考書候補の本が並んでいるが、今回本書を手にしてみて、前版の良さを生かしつつ、最新の研究成果も加味されたものとなっていることに気づく。最初の章で生命を理解する上での階層性について触れられたのち、各論の章が続く。幅広い生物の世界を初心者で紹介する上で全体が23章から構成されるのはやむを得ないが、その長さを感じさせずに手に取りやすく、使いやすさを感じる。初めて教壇に立つような方でもこれを手にとると、安心感を感じることができるのではないだろうか。

本書全体を通じて良質の図や写真が数多く掲載されており、巧みに文章の内容を補足している。生き物や現象、事例などを見せる写真も、別途写真集のなかでアートとして使われているのではと思わせるハイクオリティーのものがある。遺伝子の発現やタンパク質の構造ができる過程など多くの段階を示す必要がある際には、見開きのページをまたいだ図で示すなど、長い分子は長く、長いプロセスは長くその連続性を見せるなどの工夫が随所にされている。時に飛び出す絵本のように素材が教科書から飛び出してくるような感覚を持たた。

各章の最初の節では、内容と関連があつてまさに現代社会で起きている関連事項、問題となっている事例が紹介されている。ある事項を理解するのに若い人はなぜ今このことを学ぶ必要があるのか、どういった社会との関連性があるのかを早く知りたいであろう。従来の教科書では各章

の冒頭で歴史的背景や科学史的な観点から記述が始まるのが常だが新鮮味に欠けると感じる人が多いのではないか。生物学の授業の場合、どうしても次々と知識を伝え続けてしまい、学生が消化不良を起こしがちである。どうしてこのようなことを学ぶのか、それによって何が見えてくるのか、こうしたことがどのようにして明らかとなったのかと心の底で思いながらもどこか見えない疑問を抱え続けていることも多い。その点、本書は一つ一つの章の中で読者の意識が維持されやすいような構成に工夫が施されていると感じる。

過去数年は新型コロナウイルス禍の重い空気の中で、対面授業がなかなかできなかった。そこから解放されて対面での授業が再開されて、学生と向き合い、距離感をどのようにすれば良いのかが難しいと感じる場面がある。さらに当の学生たちも高校時代は多くオンライン授業しか経験していない。いかにして学生とのやり取りの場を設けるかの試行錯誤をされている方もおられよう。本書を使うことで各章ごとにその内容を日常の経験などと結びつけ実感しながら、学びを続けてもらえそうである。学生の意識を高めた上で具体的に詳細を語ることができ、集中力を維持できるであろう。事例の中には、日本であれば別の紹介をした方が良いだろうと思うものもある。ただそれは容易にそれぞれにカスタマイズしたうえで講義に向かうことができるであろう。生物学からまさに生きている様子を学んでいるという感覚が味わえるのではないだろうか。

6名の研究者がそれぞれの専門分野の章を担当されており、翻訳が非常に丁寧になされていることを感じた。

(東京大学大学院総合文化研究科 渡邊雄一郎)